

---

# 理想王子

田山らら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

理想王子

### 【Zマーク】

Z4390A

### 【作者名】

田山ひらり

### 【あらすじ】

もしもあなたの目の前に理想にぴったりの王子様のような男の子が現れたらどうしますか？そんな少女マンガのような夢のようなお話に巻き込まれる女子高生のお話です。

## カミナリBOY（前書き）

初めて書きました。ちょっと変でも許してください。  
感想くれたら嬉しいデス！

## カミナリBOY

もし田の前に自分の理想そのままで、一目見ただけでびびびっときて、

恋に落ちてしまうような理想の王子様のような男の子が現れたらどうする？

＼  
南 真子の場合／

あたし、南 真子。16歳、高校一年。彼氏いない歴16年。

あたしは超恋愛無頼着女で、平氣で男の子の前でも、下ネタを言ってのける。

もちろんクラスの男子はドン引きする。なので恋愛対象には絶対ならない。

それでも少なからず笑ってくれる男子もいるから、男の子と無縁つてわけじゃないんだけどね。

けどやっぱり友達止まり。それはあたしのファッショングも関係してると思ひ。

派手め古着系アメカジ。世の男の子はミシキーのトレーナー着てる女の子よりも、

エロカワなキャミソール着てる子のほうが良いのだ。

聞いてる音楽も、「G.I.S.T.EやP.I.N.N.a of Detri系だ。

こんなロック少女に誰が恋してくれるだろうか。大塚愛も倖田クリも聞かないロック少女に。

もううん恋には興味はある。したいとも思ひ。

でも相手がいない。自分に自身がない。

下ネタで笑ってくれる男子の恋の相談にはのれても、あたし自身も恋愛対象にはならない。

そう思っていた。あの子が現れるまでは。

ある晴れた月曜日、あたしはいつものようにぶらぶら歩きながら学校に向かっていた。

あたしは朝がものすごくわい。

毎朝ふらふらしながら記憶飛ばし飛ばしで、学校に着く。

いつもは意識がはつきりしてなくとも、気づいた時にはちゃんと自分のクラスの、

自分の席に座つていて、なんだ、あたし意外とやるじゃんなんて思いながら一時間目をうけるのだ。

今日もそのはずだった。が、

なんだか今日はふわふわしていて、地に足が着いてないって感じがしたんだ。

それもそのはずだ。だってあたしは『氣づいて起きたとき』は黒い背中の誰かにおんぶされていたんだもの。

あたしはびっくりして起き上がつて叫んだ。

「うおわあああああ！」

「うおわああああああー！」

相手もびっくりして叫んだ。

「ちよっとー、暴れないでくれます？俺、電車で倒れたあんたを、じつて親切にもおんぶして学校まで連れて行つてるんだからー！」

よく見るとおんぶしてくれてるのは男子高校生で、彼の制服はまさしく高校の学ランだった。

それに歩いてくる道も、よく見たら通学路だった。

「え・・・あ、すいません・・・あのあたし倒れました?」

「もうですけど。いきなり電車の中でバターンとね。親切にも（強調）転校初日の俺が、おんぶしてあげたんですよ」

学ランの彼は、前だけ見て言った。

やべー・・・

直感的にそう思った。いや、直感じゃなくともやっぱこと理ひナビ。

「あの、たぶん貧血だつただけだと呟つんで、おろしきもんって大丈夫です・・・!すいません!」

申し訳なさそうにあたしが言つと彼は以外にも、

「いや、あんた倒れたわけだし無理しなくてもいいよ。いつ見えても力持ちですから」

と言つて、へへと笑つた。

かなり優しくてびっくりした。男の子にこんな風に優しくされたことのないあたしは、顔を赤くしてしまった。

ただ相手は前をむいていたから見られずに済んだけど。

「いえっ！本当に大丈夫ですから！」

「あ、そう？大丈夫なら良いんだけど・・・じゃあ降りすよ？」

よつ。といって、優しく降りしてくれた彼を見てあたしは目ん玉がハートになつた。

少女マンガみたいに。

だつて彼はあたしの理想ぴったりだつたのだ。

学ランに黒縁メガネ、ナイキのハイカットダンクのスニーカー、そして拡張されたピアス。

まさにロック少年。そんなべたな展開にあたしはクラクラして、

まさしく恋に落ちてしまったようだ。

「……あの？大丈夫？顔赤いけど？」

はっとわれに返り、相手を見た。

「あつ、えつ、そつ、そのつー！」

「ハイハイ、落ち着いて。まだ具合悪い？」

つか具合といつより眠かつただけみたいな・・・

「あ、大丈夫です！つかあの～転校生なんですか？」

「あ、そりなんだよ。ど田舎から転校してきました。藤田修馬ふじた しゅうまです。ところでも、あんた望高校の人だろ？一年八組の場所知らね？」

「ビンゴ・・・・！」それはあたしのクラスだったのだ。うわまじ？まさに少女マンガ！

「そ、それ・・・・あたしのクラス！」

「あ、まじ?..じゃあ案内してよ。お詫びこれ」と言つて笑つた彼はこの街で一番格好良かつたと思つ。

それがあたしと修馬の出会いだった。

転校生修羅（前書き）

やつと小学校まで着きましたー。これからどうぞ書こうと思はず。

## 転校生修羅

携帯の時間を見るともう遅刻寸前だった。

担任のハッサーはもう来てしまつてゐるだらうか。

「もうすぐ朝の出席をとる時間ですよ」

「あ、そんな時間が…つか敬語やめよつよ タメじやん。つかあんたの名前聞いてないんだけど?」

「そういうれば助けてもらつたのにも関わらず言つて無かつたや。あたし、南 真子です」

「南さんか。俺の新しいクラスメイトさんね。ところで南さんのクラスはどんな感じ?」

あたし達はちょうど学校の門をくぐつたところでそんな話をしていた。

「そうだな…良いクラスだと思うよ。みんな仲が良いし、男子と女子の隔たり無いし。担任のハッサーも若くて、好青年で良い人だよ!それでもなんで転校してきたの?」

「ダメ?」

ダメと聞かれても…

「だつ、ダメじゃないよつ

はいむしろ大歓迎ですが。え

「本当にっじやあ内緒~」

この時はこの内緒の意味がよくわかつて無かった。全てはこの言葉に隠されていたのに…

「ふ~ん…あつ、いつちだよ」

やつと校舎に入つて教室に着いた時にはもうハッシーが出席をとつてこるとこひだつた。

戸を修馬が開けようとしたので、あたしは制止した。

「待つて! 急に藤田くんが入つてきてもみんなわーわーなつてうるさくなるだけだし、ハッシーにも知らせないと」

「そつか。頭良いね~南さん

「だからひょいと待つてて

あたしはせきりと教室の戸を開けた。

みんなの視線があたしに集まる。

「あー！ 真子だー！ 遅くなーい？」

「何してたんだよーーお前の下ネタがねえと一日がはじまらねえし！」

最初に叫んだのは麗奈れいなで次に叫んだのは下ネタで笑ってくれる恵太けいただ。クラス中がどつと笑う。

「あはは…」

「なんだ南寝坊か？」

ハッシーが聞いてきた。

間違つても倒れておんぶされてましたなんて聞えない。

「いやあちよつとおーそれよりハッシー、ちよつヒ…」

「ん？」

あたしはハッシーを連れ出した。

廊下で修馬はひやんと待っていた。（当たり前だけど）

「ん？ 何組の生徒だ？ 早く教室行きなさい。で、なんだ南？」

「ここに！」しながらハッキーは何を勘違いしたのか修馬に注意してしまった。

「ぶ~」

「ちよ、ハッキー！ 今日転校生くる日じゃない？」

「え？ なんで知ってるの？ 僕みんなに秘密にしてたのに！ なんで？」

あたしは修馬を指差して

「これ、転校生だよ」

「ども。藤田つす」

そう修馬が言いつとハッキーが、あつちやーと一緒に謝った。

「さうか！ お前が藤田かー！」めんないやー遅いから心配したよー。何かあったのか？」

ギクつとした。もし倒れたのがバレたら恥ずかしいし、遅刻した理由が知られてしまう。

「道に迷つたんです。そしたら南さんがあなたに案内してくれて

あたしは耳を疑つた。

修馬はまたしてもあたしを助けてくれたのだ。

かつこいこ。かつこよすき。

「南が?えらいじゃないか~お前朝は意識飛んでるのにな~道は教えられるのか。珍しいな~」

「あはは…まあね…」

「じゃ、とりあえず教室に入るか~

あたしはハッキーの後ろで修馬にさつと声をかけた。

「また助けてもらひつけたね」

「別に気にすんなって」

やつ言つて修馬は笑つた。

「はーい!みんな静かにー!いきなりだが転校生紹介するぞー」

教室中がざわめく。

「藤田 修馬君だ。青森から引っ越してきたやつだ。みんなわから  
ない事があつたら助けてやつてくれ」

あたしはその言葉を聞きながら自分の席に着いた。

「なあなあ～なんでお前と転校生一緒に入って来たんだ？」

恵太が興味深々で聞いてきた。

「別にたまたまだよ」

「ふーん…」

「ね、それにしても藤田くんって真子のタイプそのままじゃない？」

麗奈がにせにやしながら言ひ。

「そ、そりがな？」

図星だけどね。

「マジ?あの田舎つべがタイプなワケ?」

恵太が修馬をバカにした。悪いけど恵太よりは修馬のほうが百倍優しい。

「あのねえー!藤田くんはー…」

でもここで優しくいって言つちやつたらなんでつて聞かれるに決まつてゐる。

「なんだよ？」

「な、なんでもねえよ！」

「変なやつ～」

前を向くと修馬と田があつた。修馬はにじつとあたしに微笑んだ。  
あたしの中で今までこんなにびびびとさわやかな人がいただ  
ろうか。

修馬が気になつてしかたない。もっと、もっとと話がしたい。

「青森から来ました。藤田 修馬です。ようじへお願ひします！」

「じゃあ藤田は南の隣の席に着け

「えつ、ー！」

またベタな展開かよつと思いつつ、心の中でガツツポーズしたあた  
しだつた。

## 友達のキス（前書き）

遅くなつてしません、頑張つて書いていきたいです

## 友達のキス

心中でガツンポーズしてみたものの、隣を意識しちゃって授業に集中できない。

一時間目の現文の時間だつて…

「あのさ、教科書見せてくれませんか?」

つて言われて。

「え、え、つ? !見せるの教科書? !」

だつて教科書見せるのつてガーッと机くつづけて、超接近するつて」とじじゃん!

ど「ひょいー

「え、? 」

するとあたしの後ろに立てる麗奈が、くすりと笑つて言つた。

「真子、藤田くん教科書まだ持つて無いんだよ。見せてあげなよ」

「あ、だよね・」めん・」

「そんなんに拒否られるとはね?」

と修馬が困ったように笑つた。

「あの違うの〜!全然見せられるから大丈夫!」

と力を込めて言つたら、修馬がにかつと笑つて、

「あそ？じゃあ遠慮無く『』

と言つてがつちり机をくつづけてきた。

あたしは真ん中に教科書を置いて見やすいように見開いた。

でも相手に緊張するのがバレないよう気に付けなきゃならなかつた。

別に修馬とあたしがこの先どうなるか訳じゃないかも知れないけど、なぜか修馬だけは男の子として気になってしまつ。

こんなベタな展開に結局一番どっぷりはまっているのはこのあたしだ。

久しぶりにドキドキしてゐる。

なんだか恥ずかしくて笑つちゃつわ。

「コンコン」

修馬が突然机を叩いた。

「？」

あたしが口だけ動かして何？と言つと自分のノートにこんな事を書き始めた。

『俺の後ろの席の人、南さんの彼氏ですか？』

あたしは目を丸くして修馬の後ろをみた。見なくても誰かはわかるてる。そこに座っているのは恵太だ。

向いた瞬間に恵太と自然に目が合った。

恵太も声を出さずに口だけ動かして『なんだよ』とふくれつ面で言った。

あたしは目を丸くしたまま前に向き直した。

なんで恵太とあたしが?  
ありえない。

あたしは自分のノートに返事を書いて見せた。

『なんで? ありえないよ(笑)』

修馬はうーんと唸つて返事を書き始めた。

回りは静かで(というか思い思にみんな携帯いじったり、漫画読んだり、内職してるんだけど)先生の声だけが響く。

『だつて俺が南さんと話すとあの人、すこいにらんでくるよ』

ええつ? 何それ…あたしと話すと、恵太が修馬を睨む? 無い無い(笑)

元々恵太は血の氣が多い性格だから、ただ単にガン飛ばしただけかもしれない。

あいつ… いちいちケンカ売らなくて良いひつ。

『あいつバカだから気にしなくて良いよ』  
あたしはノートに書き続けた。

『そんな風には思えないけどなあ～』

『え、思えないって何が?』

『自分で考えなよ(笑)』

キーンゴーーンカーン…

そんな事メモしながら話してたら授業が終わってしまった。(一番  
良いことなので)

休み時間が終わると同時に修馬の回りにびわっと男子が集まり始めた。

ただし恵太は何が気に入らないのか教室を出て行ってしまったけど…

それをよそに修馬は回りの男子に質問攻めになっていた。

「青森つて寒い?…」

当たり前だろ(笑) そんな当たり前の質問にもうやんと修馬は答えてあげてる。

「寒い寒いー下手したら死ぬよー」

「じゃあ、どうくんに引つ越してきたの？」

そ、それはあたしも気になるw

「東望台だよ」

あたしと一緒ぢゃん…またベタな展開だし…

「で、何部入るの？」

軽音かな？見た目ロックだしw

「んー中学からずっとバスケやってるから、バスケ部入りたいな」

「つおおおおつ…！」

バスケ部の男子が大袈裟なリアクションをする。

バスケ部か。意外だなあ～バスケ部…げつ！恵太バスケ部じゅん…  
うわあ…絶対ヤバイよ…

恵太に話したい事もあったのであたしは教室を出て恵太を探しに行つた。

と言つても恵太が行くといひからいすくにわかるんだけど。

あたしは階段を上がつて屋上へ出た。

「おら～チクリだ～」

「うひー」

そこには案の定煙草を吸つている恵太がいた。

「それでもスポーツマンかい」

恵太は煙を吐きながら笑つた。

「いいの俺は、バスケうまいから」

恵太はバスケ部のエースだ。

「またそんな事言つて。だつたらなおさら吸うなつつのー」

「お前も俺が吸つてる理由知つてんだろ」

「まあね」

「だつたら止めんなし〜」

恵太が煙草を吸つてる理由はあたしも知つていた。

恵太はお母さんとソリが合わずで家で息が詰まつてしまつらしく、そのストレスの吐け口に煙草を吸つているのだ。

「あのや、藤田くんにガン飛ばしてみつしょ」

「あ、あ？」

恵太があたしを睨む。別に怖くないけど。

「恵太、そんな顔してるとジユノンボーイ級の顔が台無しだよ」

「なんで俺があんな田舎つべにガン飛ばさなきやならねえんだよ！」

「別に飛ばしてないって言うなら良いけど、藤田くん、バスケ部に入るって言うから先が不安でね」

明らかに恵太が嫌な顔をしている。「何、なんか文句あるの？」

「別に～ねえけど～？」

超ありますって顔してんじやんかよ。

「本当に～？」

あたしがいぶかしげに聞くと、じつとあたしを見つめて恵太は黙ってしまった。

あたしは見つめ続けられるのって苦手だから、先に話した。

「なに～？」

「お前はあいつの前だと女の子になる」

マジ顔で恵太は言った。まるで確信しているような自信たっぷりの顔で。

もちろんその通りだつたけど、ここは否定するに決まってる。

「は？何言つてゐるの？あたしが？意味わかんないな～あたしそういうキャララじやないじゃん。くだらない事言つんだつたらもう授業はじまるし、あたし行くからね」

意外にもさうりと聞えたと思ひ。嘘なんて言つの簡単なんだ。

「嘘つくな」

恵太は引かない。

「ついてない！もう良い、勝手にしなよ」

あたしは屋上の出口へと早歩きで向かった。

「おこー！待てよ」

シカトしてあたしは歩くもうすぐ階段だ。せーーと格好良く降りて、恵太なんて無視してやる。

「待てつてー！おいー！」

恵太の声が強くなる。

あたしは気にして歩くが、追いかけてきた恵太に腕を取られてしまった。

「離せ！痛い！」

あたしがわめくと壁にあたしを恵太が押し付けた。やっぱり男の子

の力には勝てない。あたしは意図も容易く壁に半ばぶつけられた。

「…ついた…」

「言つこと聞かないからだ」

「近い。離れて」

あたしと恵太は近すぎて気持ち悪いくらいだった。まるで恋人同士みたいに。

「真子はあいつが好きなんだ?」

また恵太が確信をつく。

「違うつて言つてんじゃん!しつこいんだけど!たとえそうでも恵太に関係ないつ…んつ!」

そう言つた瞬間恵太にキスされた。

しかも『ティープ』はねのけたいのに向こうの力が強くて動けない。

「は…離してつ…」

そうあたしが涙ぐみながら小さい声で訴えると、恵太はキスをやめた。けど顔が近くで向こうの吐息が聞こえるくらいだった。

「関係あんだよ…俺は真子が好きだから…」

「『めん、どいて』

言つた瞬間にあたしは恵太を押しのけて、とにかく走った。

なんで？なんで？

恵太は友達じゃないの？

なんでキスできるの？

恵太があたしの事を好き？意味がわからない。だって恵太には彼女がいるじゃん。

そうなのだ。恵太には彼女がいる。なのになんで？

悲しいのか悲しくないのかわからないけど、涙が出てきて拭いながら教室まで走った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4390a/>

---

理想王子

2010年10月10日03時10分発行